

日本医史学会編『医学史事典』刊行記念 令和5年1月例会

第Ⅳ部 日本の医学(2)：近現代

——日本の近代医学の黎明と現代の医学と医療——

渡部 幹夫

今回発刊された『医学史事典』は日本に医学辞典はいくつもあるが、医学史としての事典は身近にはなかったところに編集・出版されたことに大きな意味があると思う。編集を担当した日本医史学会は日本医学会の第一分科会であるが、日本の歴史の学会との連携は多くない。会員の多くは歴史学を学術的に学んできた者とは言い難い。会員のバックグラウンドは非常に多彩であり、またその研究領域も多様である。その学会が編集した『医学史事典』が一冊の事典となり、広く日本の社会で伝わることを願う。

この事典の編集期間は世界的なCOVID-19のパンデミックの最中に重なり、医学・医療が社会の中で大きな存在であることを再認識された時期である。これからの医学・医療の方向を考えるうえで、世界と日本の医学史が日本語による一冊の事典としてまとめられたことは大きな意味を持つ。世界と日本のそれぞれを「古代から近世まで」と「近現代」の2部ずつ計4部に分け、「社会の中の医学」を加えた5部構成となったことにより、日本医史学会の編集といえるものになった。第Ⅳ部「日本の医学(2)：近現代」の編集幹事を担当しての私見を少し加えて報告する。第Ⅳ部の編集委員には中村安秀、柳川鍊平の二氏に加わっていただいた。

第Ⅳ部「日本の医学(2)：近現代」は幕末・明治の統一国家として、医学の範を西洋医学に決めてから、あまたの問題を抱えながらも、現在では国民皆保険医療体制下にある日本の医学史を担当した。多くの方に執筆をお願いし、81項目46人の執筆を得た。日々身近にある医療の体現者また

は対象者となるわれわれであるが、それを歴史として書くことは、これからの日本の中でどのように医学・医療が変わっていくのかも考えると、それほど容易なことではない。それぞれの項目について史的研究をも行っている執筆者にお願いすることになり、1項目だけの執筆者が33名となったことは第Ⅳ部の特徴をなす。したがって日本医史学会会員以外の多くの方の執筆も得た。近現代日本は200年に届かない、歴史的にみれば短いが激動の時代である。第Ⅳ部としてまとめるにあたり、次の4つに時代区分を分け項目を組み立てた。【幕末明治期を中心として】24項目、【大正・昭和戦前】11項目、【昭和戦後・平成】16項目、【通史】30項目。4つの時代区分に分けたことによって、それぞれの項目が歴史としては独立したものではなく、それ以前の時代や世界の状況と連関していることが明らかとなっている。幕末明治期と通史、が多項目となったことは、歴史事典としては順当なものとする。しかし大正改元後110年、第2次世界大戦の終戦後77年を過ぎた現在では、大正・昭和戦前、昭和戦後・平成の医学史がやや薄くなったと思うところもある。特に今日に至る臨床医学の日本での専門領域の進歩と、基礎科学の基礎医学や臨床医学への歴史的貢献の記録について項目立てがすくなかった。この領域の史的評価と、現代史の中での医学史はまた別の機会に、日本医史学会の編集でなくとも刊行される機会があればよいと考えている。また本例会の発表を準備して気が付いたことであるが、第Ⅳ部の通史に教育史がないことは、日本の医学教育の一つの特徴を、意図することなくとらえてしまったのでは

ないかと、私的には考えるに至った。

第IV部の中で特筆しておきたいのは「近代看護導入」「産婆から助産婦、助産師」「保健婦」「歯科医師」「理学療法士」「薬剤師」「栄養士」など、現代医療の多くを担う職種の日本におけるはじまりからの史的記述に、それぞれ1項をたててあることである。また、災害や戦争と医学の倫理学的問題、経済学的な医学・医療への視点もとりあげている。本事典の第V部「社会の中の医学」が第IV部の中で書ききれない部分の多くに項をたてて、補ってくれたことにより本事典の価値は高まっている。

本事典が日本医史学会の編集となったのは2019年の名古屋での第120回総会のころと記憶しているが、短期間にこの事典が刊行されたことには、それぞれの項目執筆者の寄与するところが大きい。同時期に重なったCOVID-19パンデミックの中、出版社の編集者にも、経験のない編集過程

であったと思う。それぞれに個性のある執筆者の文体を事典として統一感のある形式・文体で編集されたことを感謝したい。編集者の提案であった関連する項目への参照マーク(☞)の付記など、第I～第V部を超えての連携が編集委員会などとして、人が集まれる機会がもっと多く可能であったならば、本事典の利用者にとっても、もっと便利な事典となったと考える。

われわれが編集委員を引き受けた4年前には想像のできないような世界そして日本である現在、世界は歴史的な時代を経験しているといってもよいかも知れない。本事典にあげられた、それぞれの項目には歴史の記述と共に将来への課題も多く提示されており、執筆依頼にこたえて執筆していただいた方々と編集者に深く感謝したい。個人としての蔵書としてだけでなく、当初の目的であった公共図書館や学校図書館での配架がすすむことを期待している。